

日英ことわざ比較

43期生

I テーマ設定の理由

日頃、英語にもことわざがあること、また日本のことわざに相当することわざがあることに興味を持っていた。日本のことわざは日本人の考え方や生活・風土と深く関わっているが、英語のそれはどうなのか。両者を比較する中で、これらの事柄に触れられればと思い、このテーマを設定した。

II 研究方法

- (1) ことわざとは何か、その意義を考える。
- (2) よく知られている日本のことわざと、それに意味が近い英語のことわざを文献より調べる。また、各々を考察し、互いを比較・考察する。(由来、出典があれば挙げる。)
- (3) 日本のことわざ、英語のことわざの特徴を比較する。
 - ・出てくる動物について
 - ・用いられている数について

III 研究内容

(1) ことわざとは

① ことわざの意義 ▶ 古くから人々に言い習わされた言葉。教訓、諷刺などの意を寓した短い句、秀句。

また、先人の生活の知恵とも言える。その民族の歴史と文化がぎっしり詰まっている。

② 英語のことわざ ▶ 英語では、ことわざのことを表すのにいくつかの語を用いる。

・世間でよく言われるもの = saying (一般的)

・古くから言い古されたもの = saw

・具体的な言葉で諷刺などを

表したものは = proverb

・短い格言、処世術 = maxim

例: "More haste, less speed," as the saying is.

(ことわざにある通り、急がば回れだ。)

(2) 日英のことわざ比較

● 頭隠して尻隠さず

意味: 一部分しか隠れていないのに全部隠したつもりでいるのをあざけた言葉。

考察: 「頭隠して」は肯定、「尻隠さず」は否定。この2つを並べ対比のコントラスト

トの面白さがある。また助詞を使わないでできるだけ省略している。

The foolish ostrich buries his head in the sand and thinks he is not seen.

訳：愚かなダチョウは頭を砂の中に埋めて、他から見えないと思っている。

考察：非常に長くて説明的。

〈比較・考察〉

日本のものも英語のものも画面的には同じ光景である。日本の方は、助詞を省略して、前半分と後半分の言葉の対比と反復で意味が強調されているのに対して、英語の方は、具体的で説明的である。

● 一寸の虫にも五分の魂

意味：どんな小さい弱いものでも、それ相応の考えや根性をもっているものだから馬鹿にできない。

考察：「一寸の虫にも」「五分の魂」とも七音ずつでゴロがよい。

一寸も五分も長さの単位としては小さいが、それに相反するように魂という言葉で締めくくっている。

A Even a worm will turn.

訳：虫でも向き直ってくる。

B Tramp on a snail, and she'll shoot out her horn.

訳：かたつむりを踏みつければ角を出す。

考察：「worm」はミミズ、毛ムシ、アオムシなど細長い最も卑しいとされている虫を指している。又、かたつむりは女性名詞（優美・可憐な感情を起こすもの、小さいもの、それに乗り物などは女性語として扱う。これらは文語体の文に用いるのが普通）である。これは、後の「角を出す」という表現と結びつけて考えると大変面白く感じられると思う。

〈比較・考察〉

日本のものも英語のものも、小さい虫や卑しい虫、かたつむりと題材は同じ。

また、日本のものは後に続く「～がある」を省略しゴロのよさを狙ったのに対し、英語の方は論理的でわかりやすい。

● 内弁慶（の外すくまり）

意味：自分の家の中では威張っていても、外に出ると全く意気地のない人間をいう。

考察：普通一般には、「内弁慶」までで使われている。「弁慶」という固有名詞はことわざには珍しい。

A lion at home, a mouse abroad.

訳：内ではライオン、外ではネズミ

考察：a……a……, a……a……, と発音がリズムカルである。同じ音を繰り返すことで口調が整えられる。又、比喻を用い面白い。

〈比較・考察〉

日本のものは歴史上の人物を用いているが、それが単に個人でなくなっている。

日本のものも英語のものも、省略でかえって鮮明になっている。

● 馬の耳に念仏

意味：いくら意見してもききめがないこと。

考察：全体を通して否定的な意味のことわざになっている。また、後に続けて「しても仕方ない」というような言葉が省かれていると考えられる。

A A nod is as good as a wink to a blind horse.

訳：めくら馬には、うなずいても目くばせしても同じことである。

B To sing psalms to a dead horse.

訳：死んだ馬に賛美歌を歌って聞かせる。

〈比較・考察〉

日本のものも英語のものも馬を題材にしている。日本のものでは「念仏」英語のBでは「賛美歌」というところに両国の違いがよく出ていて、興味深いものとなっている。

● 蝦で鯛を釣る

意味：わずかな元手で大きな収穫をあげること。

考察：蝦と鯛が用いられている理由として、価値に大差があることの他に音数が同じであることと、鯛の〔i〕と蝦の〔i〕が韻をふんでいることも関係していると思われる。

To give a pea for a bean.

訳：いんげん豆を貰おうとしてえんどう豆を贈る。

考察：私には、いんげん豆とえんどう豆の優劣はわからないが、各国特有の価値観があるものなのだと思う。

〈比較・考察〉

日本のものも英語のものも、生活に密着した食物を題材にしている。

● 帯に短したすきに長し

意味：中途半端で役にたたないことのとえ。

考察：前半「帯に短し」と後半「たすきに長し」の比較が面白い。前半・後半とも七音でゴロがよい。

A Too much for one, and not enough for two, like the Walsall man's goose.

訳：ウォールソル人のガチョウのように、1人で食べるには多過ぎるし、二人には十分でない。

B It is good neither for one thing nor the other.

訳：1つのものにも、また他のものにもよくない。

考察—Aは、イギリスのパーミンガム付近に住んでいたウォールソルさんのお話が由来である。「『夕食にガチョウを食べますか。』と聞かれた時、「いや、ガチョウという中途半端な鳥は食べません。』と答えた。一人で食べるには大き過ぎるし、二人では物足りないのでこう答えた。」というのが、本当はガチョウが贅沢な食物なので買えなかったという話。

〈比較・考察〉

日本のものと英語のBは説明的である。

● 河童の川流れ

意味：名人や達人にも失敗はある。

考察：体言止め。かっぱの「か」とかわの「か」が韻をふむ。

A The best horse stumbles.

訳：駿馬もつまずく。

B Even Homer sometimes nods.

訳：ホーマーもこっくりすることがある。

考察：Bは詩人ホーマーでもその作品の中には居眠りをしていたのかと思わせるものもあるということわざ。

〈比較・考察〉

Bと「こうぼうも筆のあやまり」ということわざを比較してみると、すごくよく似た感じがあると思う。

● 郷に入りては郷に従え

意味：環境に応じた世渡りの方法を教えた言葉。

考察：「郷」の重ねにより、人に納得させる。

A When you are at Rome, do as they do at Rome.

訳：ローマにいるときにはローマの人がするようにせよ。

B When in Rome do as the Romans do.

訳：ローマではローマ人のする通りにせよ。

考察：AもBも、初期キリスト教会の指導者、聖アウグスティヌスの書簡より由来する。

〈比較・考察〉

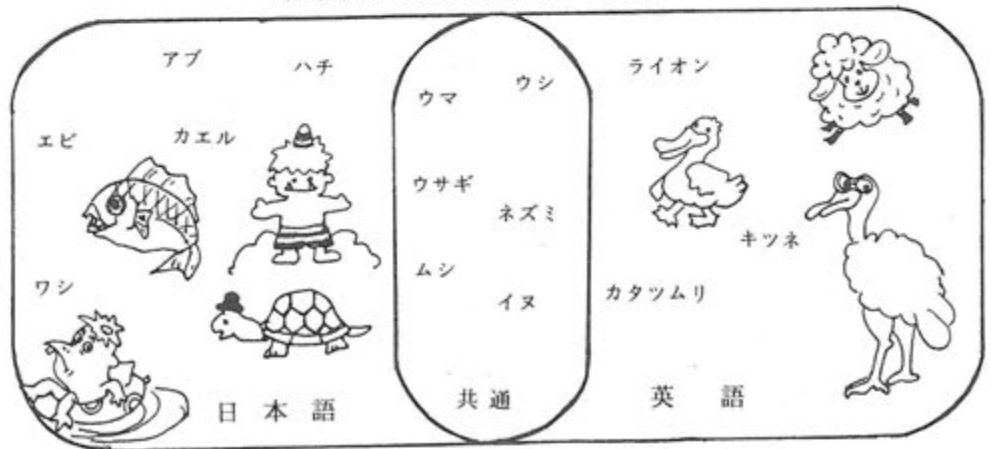
日本のものでは固有名詞でない土地・場所の「郷」を重ねて使い、英語のものでは固有名詞「Rome」を重ねて使っているところに差はあるが、形式はほとんど同じである。

(3) 考察—日英のことわざ各々の特徴

私はここまで日本のことわざ50個とそれ以上の英語のことわざを比較し、本稿ではその中から8個を紹介した。その結果、両者とも「生きもの」「数」を用いたものが多いのに気付いた。そこで、それらについて調べてみることにした。

① 生きもの

〈日英のことわざが登場する動物〉



前ページの図は左側に日本のことわざで特に登場する動物、右側に英語のことわざで特に登場する動物、そして中央に両方に共通して出てくる動物をあげたものだが、実際、ことわざ全てを調べた上での正確な統計ではないので誤った部分も多いと思う。しかし、日本特有のものとして「すっぽん」「鯛」「河童」があげられると考えられ、英語特有のものとしては「ダチョウ」「ライオン」「ガチョウ」「羊」があげられると考えられる。扱われている生きものは地域差があるが、その国の人々と深く関わりのある生きものが扱われているにちがいない。私はことわざの中に生きものを登場させるのは、年齢差や知識の深浅に関わらずそのことわざの持つ意味や真理が人の心にすっと馴染むからではないかと考える。

② 数

一番注目されるのは、「9」という数字が英語のことわざでしばしば使われていることである。このnineという数字は、A cat has nine lives.

(猫に九生あり。)

のように英語では多数を表している。私の調べた中では日本のことわざにおいて

Japanese	Japanese English	English
千個		20
五個	1個(個人)	
五十個	(体)十個	19
百個		
三人	2個四	9 (日)
八		

この「9」という数字は使われていない。日本において多数を表す数としては、「千」「百」「七十五」を用い、かなり誇張した表現を好むようである。又、お金の単位やキョリの単位については現在使われていないものが多く見られるが、これは歴史を知る材料ともなっている。古い単位が使われていても、そのことわざの意図するものは十分理解することができる。日本のことわざ、英語のことわざのどちらにおいても数字を多く用いる理由は、具体的になることにより非常に馴染みやすくなるからと考える。

IV 結論

ことわざは、人々が生きていく中で、反省したり、励まされたり、確認したりする一つの指針となってくれる。これは、日本のことわざにおいても英語のことわざにおいても同様である。

しかし、日常生活の中でこれらがその国々で生き続けてきたのは理由があると考えられる。それは、その国の人々の歴史・文化を大きく反映している言葉の芸術だからである。

日本のことわざは、日本の文化がそうであったように中国からの影響を深く受け、英語のことわざは、ヨーロッパの文化に深い影響を持つギリシャ・ローマから由来するものが多い。又、それはキリスト教の影響でもある。両者において根本的に変わることはないのは、真理をついている、的確である、覚えやすく使いやすいことである。しかし、それぞれその国独自の言い回し、表現方法を持っている。例えば、日本のものの特徴と

して、体言止め、擬人法、大胆な省略、そして多くの場合が五音か七音で納まっていることである。英語のものでは、論理的な表現、説得するような句調が多いが、それでも言葉の対比、ユーモラスな表現が見られる。

両者を比較してみて、共通点、相違点はあったが、どのことわざもその表現の巧みさには驚かされた。そしてありとあらゆる人がいろんな場面で、このことわざこそ、今私の為にあるのだ、と感じている。

普遍的なことばがことわざなのだとわかった。

V 総括

今回の研究で、全く知らなかった英語のことわざを少しでも知ることができた。考えていたより楽しい研究で、とても得るところが多かった。しかし英語の知識不足で十分な考察ができないまま終わってしまい残念だ。もっと英語の知識があったならば違う解釈や違った面からの比較もできたのに、と思った。

VI 参考文献

- 新村 出 編 (1955) 『広辞苑 第三版』 (岩波書店)
奥津文夫 著 (1983) 『英語ことわざ散歩』 (創元社)
小島義郎・竹林 滋 編 (1984) 『LIGHTHOUSE
JAPANESE-ENGLISH DICTIONARY』 (研究社)
柴田徹士 編 (1988) 『THE NEW ANCHOR
ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY』 (学研)
山本忠尚 監修 (1980) 『日英比較ことわざ辞典』 (創元社)
橋 幸一 編 (1979) 『ことわざ 故事慣用語 集録』 (西北出版)
吉田正俊 著 (1983) 『解明 新英文法』 (文英堂)